

## 収蔵品整理 雑感

文芸館では、日常業務の合間を縫って、収蔵品の整理を行っていますが、先日、思いがけない収穫があり、うれしくなりました。ご紹介します。

今、曾宮一念から藤枝静男(勝見次郎)に宛てた葉書を整理しているのですが、ある葉書の内容を裏付けるために、曾宮一念の随筆に当たる必要が出てきました。そこで、館内に寄贈されている曾宮一念の随筆集を順次捲っていったところ、一冊の本のケースから曾宮一念の自筆原稿が出てきたのです。それだけでも喜びなのですが、その内容が浜松に関係したことなのです。

そう言えば、他の葉書の中で、曾宮一念が藤枝静男を通して、「浜松百撰」から表紙の絵と原稿の依頼を受けていたことを思い出しました。そこで今度は浜松百撰を遡って探したところ、見つけました。1959年9月号は彼の表紙画で飾られ、原稿と同じ題の随筆「大井川の西」が載っているではありませんか。自筆原稿・葉書・浜松百撰とが結びついていた時は、思わず胸が高鳴りました。

最初は全く別の事の裏付けで始めた作業ですが、まさに瓢箪から駒。しばしば来館される講師の先生が「資料整理にはミステリーの謎解きの楽しさがある」と仰っていましたが、その言葉を実感したひとときでした。



## 文芸館の四季



ラジオから「猛暑」だの「炎暑」だのという言葉がしきりと流れてくるある日、目から涼を求めようと玄関前に出て緑陰を眺めていると、下の藪の中に光沢のある葉の植物が群生しているのに気づきました。なにやら白い花のようなものも見られます。

間近まで降りてよく観ると、全体の高さは0.5から1m位。長楕円形の大きめな葉の間から更に直立して茎が伸び、その先端に真珠のような袋状のものと、1cm足らずの白い花が咲いていました。茎を手折って逆さにすれば、丁度白い火花がはじけている線香花火のように見えることでしょう。

情けないことに私は今一植物の名前に疎いのです。事務室に戻って植物図鑑で調べると、どうやらヤブミョウガのようです。

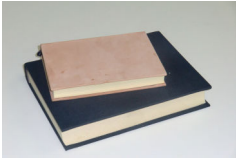
後日、よく文芸館を利用して下さる俳句の先生にお尋ねしたところ、ヤブミョウガだというお墨付きをいただきました。

その先生曰く、「白い花は日向より日陰の方が映えますね」私は思わず共感の声をあげました。



## お知らせ

- 8月15日から募集が始まる講座のお知らせをします。「自由律俳句入門講座」・「俳句入門講座(後期)」です。いずれも往復はがきでお申し込みください。
- 只今、9月30日に行われる、歌人村木道彦先生の講演会の申込みも受け付けております。こちらは電話かFAXでお申し込みください。



## 井上靖、浜松中学受験

湯ヶ島の豊かな自然の中で、毎日毎日楽しく遊び暮らしていた靖が、浜松へ来て人が変わったように真剣に勉強するようになったのは、父母の監視下にあったこともあるが、次のような理由によることの方が大きいようだ。

私は自分が中学生になりたいと思い、そうしたことで勉強したのではなかった。また今度も中学校へ入れなかったら、自分が今まで育ってきた郷里の田舎に対しても、田舎の小学校に対しても悪いという気持ちの方が強かった。母からも田舎の子は困ると言われたが、学校に於ても、教師から同様のことを言われた。

「君の前の小学校では何を教えていたんだい？」

若い教師に言われると、私は辛かった。そしていつか自分のためというより、田舎の小学校のために、何とかして入学試験にだけはパスしたいと思った。（「帽子」）

入学後しばらくは、ここに書いてあるように目立つくらい靖の学力は低かったのである。入試倍率のことを考えると「到底自分の実力では競争者を排し得ようとは思われなかった」状況にあったようだ。

田舎の学校やそこに育った靖を非難した両親の心の奥には、親の意向を無視してきたかの（祖母）や靖への悔恨の思いもあったのであろう。靖にはそれがわかったはずだから余計落ちたくなかったに違いない。

昭和12年2月に書いた「試験について」というエッセイに、浜松中学受験時の忘れられぬ出来事を書いている。

自分より一列前の右側に坐っていた少年がカンニングをしているときの顔である。（略）教師の隙を窺いながら、時折、そっと敏捷に地理の本をめくる狐のようなその狡智の表情である。子供心にはそら恐ろしく感じただけであったが、今考えると寧ろ青い妖気を持っていて一種の美しさを感じる位である。

この出来事はどちらの年の入学試験の時のことだったかは不明である。試験が終わって、靖は満足すべき出来ではないことを悟り、また一年浪人することの辛さより、郷里の小学校の威信を回復出来なかったことを悲しんでいる。

私は試験場から出ると、初めてその日解放された気持で、寒さの薄らいだ早春の浜松の町を歩いた。町を歩くのは初めてと言ってよかった。私はこの町へ来てから、小学校と自分の家を往復する以外、どこへも出歩かなかった。町の洋服屋はどこも中学校の制服と学帽とを飾窓に出してあった。私は洋服屋がある度に一軒一軒飾窓を覗いて歩いた。

その日の靖少年の心境がありありと偲ばれる一文である。